

『それは暗く汚れた楽園』

それは、広い静かな公園の片隅にあった。
古ぼけて薄汚れた公衆トイレ。

このトイレを使う人はほとんどいない。
公園の敷地内にはもう一箇所、比較的新しいトイレがあるからだ。
立地的には新しい方は公園の入口近くに、このトイレは奥まった場所にあるので
いちおう存在意義はあるのだが、やはり綺麗なトイレを使いたいと思うのは当然で
漏れそうなき以外は少し遠くても入口のトイレに向かう人が多い。

あと、このトイレには噂がある。
昔このトイレで首吊りした人がいて、その幽霊が出るという噂。
用を足してると視線を感じるとか、人影を見たとか、まあよくある怪談話だが。
このトイレに人が寄り付かない理由の一つだろう。
もっとも深夜に肝試しと称してやってくる連中はいるみたいだが。

ともあれ俺はオカルトは信じないタチなので気にしない。
俺にとって重要なのは「人が寄り付かない」という点だ。

俺は最近、一人の男の子と知り合いになった。
その子の名は「加瀬 啓太（かせ けいた）」

俺は大学やバイト先から帰るときに、この公園を通るのだが
ある頃から一人ベンチに座る男の子をよく見かけるようになった。
スマホや携帯型ゲーム機でゲームしてるようだ。

俺は次第にその子のことが気になっていた。
…いや「目をつけた」という表現が正しいか。
その男の子は小柄でとても可愛らしい好みの容姿をしていたから。
ぶっちゃけ、この時点で俺はこの子を邪な目で見ていた。

そしてある日、思い切って声を掛けてみたことが交流の始まりだった。

啓太はとても大人しい性格で、大はしゃぎしたり奇声をあげたりという
この年代の子に見られる行動は殆ど見られず落ち着いていて口数も少ない。
かといって陰気という感じでもなく、ニコニコと愛想のいい子だった。

いつも一人で公園にいる理由は聞かないようにした。
家庭の事情とか学校での問題とか色々想像はできるが、知ってしまうと
同情で手を出しづらくなりそうだから。
まあ単に一人で過ごすのが好きな子なだけかもしれないが。

ただ色々話していく中で、数ヶ月前に父親の転勤でこの町に来たのだということは
わかった。この子を見かけるようになった時期だろう。
あとはゲームが好きなようだ。

話をし始めた当初は当然、見知らぬ大人に対して警戒感や距離感も見られたのだが。
ゲーム好きという部分に突破口を見出した俺は、ゲームの話をしたり、ゲームと一緒に
遊んだりすることで距離を詰めていった。

その策は上手くいったようで、ほどなく啓太は俺に心を許すようになった。
俺を見つけると、ベンチから立ち上がって手を降って迎えてくれるようになったし

口数も多少なりと増えて、無邪気な笑顔をみせてくれる回数も増えた。
俺のことを「お兄ちゃん」と呼ぶようになった。

そんな啓太を見て、ゲスな俺はこう思ったのだ。
「そろそろかな」と…

その日、いつものようにベンチでゲームをして遊んでいた啓太がトイレに行きたいと言ってきた。俺はこの時を待っていたのだ。

俺は例のトイレへと啓太を誘導した。
入口のトイレに向かうつもりだった啓太は戸惑っていたが
「こっちの方が近いから」と、さり気なく、やや強引に連れていく。

トイレの前まで来ると少し不気味な雰囲気、啓太は明らかに躊躇した様子だった。
これまでの付き合いで啓太に怖がりな面があるのはわかってたので、これも計算通りだ。

「俺がついて行ってあげようか？」

そう言うと啓太は安心したような表情で首を縦に振った。

俺が先導してトイレの中へと入った。
ちゃんと清掃されてる様子で臭くもないが、やはり「綺麗」という印象からは遠い。
振り向くと啓太はちゃんと俺の後ろについて来ていた。

トイレには個室が2室と、掃除の道具入れと思われる南京錠の付いたドアがあった。

「さ、入って」

俺は手前の個室のドアを開けた。

「オシッコだよ」

啓太はチラリと小便器の方を見たが、俺は意に介さず

「そうなの？まあこっちでもオシッコはできるし」

そう言って啓太の背中を軽く押して個室に入るよう促すと、少し困ったような表情をしつつ「うん」と言って啓太は個室へと入っていった。
そして啓太の体が個室に完全に入ったのを確認して当然のように俺も個室に入りドアを締め、鍵をかける。
こうして密室に二人きりという状況を作り上げることに成功した。

「え、お兄ちゃんも入るの？」

「ん？ついて来て欲しいんじゃないかった？…外で待つてようか」

啓太は個室の中をキョロキョロ見回した。
室内は薄暗く、不潔というほどでもないけど薄汚れて良い雰囲気とはいえない。

「ううん、ここにいて」

予想通りの返答が返ってきた。
まだまだ羞恥心が薄い年齢だし、俺が側にいる安心感のほうが勝るようだ。

「わかった、じゃあ済ませて」

そう言いながら、俺はさり気なく移動する。

洋式便器なので啓太が立ってするのか、座ってするのかわからないので。どちらでも「よく見える」ポジションに立った。

啓太は便器の蓋を上げると便器に相對したままズボンのボタンを外し始めた。どうやら座ってするらしい。鼓動が激しくなってきたのを感じつつ、ポジションを微調整する。

そんな俺の様子に気づくこともなく、啓太はチャックを下ろしてズボンの両側に手をかけそして躊躇なくパンツと一緒に足首までずり下ろした。

「おおお」

心のなかで声を上げる。ずっと見たかった物をついに見た瞬間。先端までしっかりと皮に包まれた白く細長い突起物。薄い褐色で細かくシワの刻まれた袋。

目の前に啓太の小さくて可愛いおちんちんがあった。そう「チ○コ」でも「チ○ポ」でもなく「おちんちん」と呼ぶのがふさわしい。

俺の視線にも股間が膨張したことにも気付くこともなく、啓太は便器に腰を下ろしてオシッコを始めた。ビチビチと水を叩く音が個室に響く。終わるまでの十数秒のあいだ、おちんちんの先端からオシッコが放出される様を目に焼き付けていた。

オシッコが終わると啓太は指でおちんちんを上下にプルプル揺らして滴を落とした。…その様子を見て、俺の気分が高まる。

今日は啓太のおちんちんを見て満足するつもりだったが。性欲が抑え切れなくなってしまった。

「…ね、ねえ啓太くん、願いがあるんだけど…」

立ち上がってズボンとパンツを上げようとしていた啓太の動きが止まった。

「お願い？」

「うん、えーっと、その…お兄ちゃんと…」

— 続く —

こうして二人は禁断の領域へと踏み込んでいくこととなった。悪戯レベルから始まり、最終的に俺と啓太は…これはそんな物語である。

※体験版はここまでとなります。